

# 学校自己評価システムシート (平成28年度)

目指す学校像	・音楽芸術の一貫教育を通じ、情操豊かな人格の形成を目指す		学校名	東邦音楽大学附属東邦第二高等学校
本年度の重点目標	・高大連携会議で検討し、変更された専攻実技課題（ピアスケール）の指導方法と評価方法の実施。 ・音楽基礎科目の学力の更なる充実 ・基本的生活習慣の確立（①時間厳守と入居整頓、②正しい言葉遣いの指導、③携帯電話の適切な使い方の指導） ・積極的な音楽活動への参加（プロのオラへの出演など）	課程	全日制・音楽科	

領域	年度目標			中間評価	年度評価		
	評価項目	現状と課題	具体的方策	方策の評価指標	進行状況	評価項目の達成状況	達成度 次年度への課題と改善策
学習指導	○多様化した生徒の音楽に対するモチベーションの向上を目指した指導方法の検討	・最近、生徒の音楽全般における基礎的なスキルレベルの差が顕著になってきている現状がある。各専攻（ピアノ、声楽、管楽器・弦楽器・打楽器）の特性に合わせて、如何にして、改善・対応していくかが課題となる。まず、レッスン担当者が生徒スキルレベルを客観的に理解した上で、その生徒にあつた指導方法・指導内容を検討し、それを実践していく。次に、それらがどのように演義に反映されているかを正確に把握し、そこで出てきた課題を再検討して進めて行くこととする。	・各専攻（ピアノ、声楽、管楽器・弦楽器・打楽器）において、指導者が個々の生徒の基本的な音楽スキルを把握し、その向上を図る。一方、課題曲の進曲にあつては生徒のモチベーションを高める。まず、第一段階として高校での各専攻実技の指導方法・指導内容における課題をレッスン担当者に提示してもらい、大学の各専門部会で検討しフィードバックさせ、高校の指導担当者は各生徒の現状に合わせ指導を生かしていくこととする。	・本学側は、大学ピアノ専門部会・声楽専門部会・管弦打専門部会があり、それぞれの専門部会が附属中学から大学院までの各専攻・専門・ジャンル別のセミナーメントを行っている。まず、第一段階として高校での各専攻実技の指導方法・指導内容における課題をレッスン担当者に提示してもらい、大学の各専門部会で検討しフィードバックさせ、高校の指導担当者は各生徒の現状に合わせ指導を生かしていくこととする。	・今年度より、ピアノ専攻者の指導方法・指導内容・評価方法についての変更がある。それは、高校一年生に課していたピアスケールの扱いであり、昨年度までは、前期試験(9月)ではスキル課題と楽曲が実施されていたが、今年度から「スキル課題の試験」に関しては前期試験と切り離して実施することになった。理由は、「スキル」が基本的な反復練習が基本であるため、「その基本的な完成度」を確認・評価するの適切な時期で実施することが効果的であると考えた。	『一年生のピアノ専攻者のスキル課題』を、今年度より前期試験と分離したおかげで、生徒は前期試験で楽曲の練習に集中して取り組めた。一方、「スキル課題」については、コンスタントの実践の結果として完成度を高めるという目標は、別の時期にずらして実施されたため、結果としてその学習成果を確認することが出来た。	・近年、生徒の音楽に関する能力・学力が多様化している現状の中で、生徒一人一人の音楽スキルと表現力の更なる向上を目指して、音楽科不可欠となる各専攻指導方法・課題の検討が必要不可欠であり、高・大連携の会議等で継続して諸課題を検討していくこととする。
	○ 科目・音楽科目の基礎学力の充実	・中学校教育での主要3科目（英語・数学・国語）の基礎学力の定着が十分でないケースが見受けられる。これは、ある意味では、ゆとり教育の反省から、各教科の指導要領の内容にかなりボリュームがある。学習者（特に音楽科受験者には入試に専攻実技が課されるため）に過度の負担がかかっている傾向がある。そこで、これらの教科の指導に於いては、適宜、中学での内容の復習を取り入れながら、その内容がどの程度理解され、学習の定着がされているかを確認しながら指導していくこととする。	・基礎学力の確実な定着を目指した指導に当たっては、各担当教員は、 ①当日の授業のポイントを具体的に明確に生徒に提示する。 ②授業内で可能な限り、質問・小テストなどで理解度を確認する。 ③生徒が授業内容が正確に理解されているかどうかを課題、ノートの検査等で再確認する。 ④各学習の評価に当たっては、観点別評価により学習者の意欲・関心・態度を判断する一手段として提出物の徹底を図る。	・基礎学力の定着に関しては、「反復学習」の効果が認められる。 ①国語の指導の中の「漢字ワーク」の定期的な提出と漢字テストの徹底した反復練習による効果は顕著である。 ②英語では適宜、「課題ノート」を課すことにより、既習学習内容の理解そして定着具合の確認を行っている。	・教科・科目（音楽科目も含めて）の指導、そしてその評価については、『各学習の評価』は ①定期試験の結果 ②課題の提出、ノートの提出、普段の小テストの結果 ③①と②を総合して評価する観点別評価の取り入れであり、日頃の各教科・科目の学習への意欲・関心・態度も重要視した評価方法を取っている。この点に関しては、改めて生徒・父母に伝え、日頃の学習への取り組みの大切さを再確認する。	・近年、生徒の学習・学校生活に取り組み姿勢が多様化してきている中で、本校の教育の基本方針として掲げている、『学習評価方法』→新指導要領の目標として、「知識や技術の到達度」+「自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などの資質や能力」の評価を基本とするものが、生徒一人一人の学習意欲の向上、生徒個人に自己の学習到達度を認識させる観点から、『意欲・関心・態度』の評価→生徒のやる気→にどれだけ結びつけて行けるかが課題と思われる。	A ・生徒の学習に対する『意欲・関心・態度』を評価するノート、課題、レポートの提出に関しては、教科担当教員と担任との連携で、提出率は各学年・全ての教科に於いて100%に達している。これは、生徒の基本的な学習意欲を確立する上で大きく貢献している。生徒にいかして更に『学習意欲』を向上させ、自らの力で『自分ひとりの様々な課題』を解決していく『問題解決能力』を身に付けさせることが課題である。
生徒指導	○ 基本的な生活習慣の確立 時間厳守の指導 適切な言葉遣いの指導 整理整頓の指導の指導	・時間厳守の指導：特に、「下校時間の指導」。放課後の楽器の自主的な練習時間（延長練習は届け出制：夏時間は6時まで、冬時間は5時半まで）終了の速やかな下校が厳守されていない。 言葉遣い：生徒各自の所有物の自己管理が出来ていない。 言葉遣い：友人間、教員に対する言葉遣いが適切でないことが見受けられる。場を弁えた言葉遣いの指導が必要。	・時間厳守：時間の自己管理が出来ていない生徒がおり、授業・レッスンを遅れている。基本的な生活習慣が身につけていないことが原因となる場合が目立つ。共同生活での時間の自己管理の意識を自ら、認識させる指導をしていく。 整理整頓：常に基本的な生活習慣（起因するもので、机上、机の中、ロッカー内の乱雑の管理を再認識させる。 言葉遣い：友人間のため一言で、大きなトナリを引き起こすことがある。適切な状況判断の基での言葉の使い方を指導していく。	・時間厳守：生徒には常に時間に余裕を持った行動を取るように指導していく。 整理整頓：毎日の学校生活の中で、意識的に私物に身ならず公共物の管理を徹底して行く中で身に付けていく。 言葉遣い：常にコミュニケーションに於いては、相手の立場・状況を的確に判断してお互いの意思疎通に支障が内容に空気になることを指導していく。	・今年度『生徒指導方針』の一つに掲げている『時間厳守』は色々な機会を繰り返して指導を継続している。大きな改善が認められてきたものの、徹底されているわけではない現状がある。（性格など）なかなか徹底させることに苦慮している。しかし、継続して指導していく。『言葉遣い』に関しては、不適切な言葉の使用が少なくなった場合、その場で指導する方法を根気強く継続していくこととする。	『時間厳守』は学校として能力を挙げ、基本的な学校生活の規律の一つとして取り組んでおり、それ相当の結果は得られている。しかし、ある面々家庭での時間厳守に対する認識は（ラフな）有るよるよるに受け止めてきたものの、整理整頓『言葉遣い』に関してはチームワーク同様に受け止めてきた。言葉遣いに関しては、生徒一人一人がきちんと身に付けて、社会生活でのコミュニケーションが確立出来ることを目指して全教員が根気強く指導に当たることとする。	B ・『時間厳守』は当然社会に出てから身に付けておかなければならない不可欠なものであるという認識をもち、継続して来年度『生徒指導の基本方針』として『学習指導』に盛り込むこととする。又、『場を弁えた言葉遣い』に関しては、高校生活の中で生徒一人一人がきちんと身に付けて、社会生活でのコミュニケーションが確立出来ることを目指して全教員が根気強く指導に当たることとする。
	○ 携帯電話の安全かつ適切な使い方の指導	・携帯電話の校内への持ち込みは許可制とする。秩序ある使用、方の指導をH R 又は全体集会で指導している。今年度は特に、『SNS』の使用にあつては、具体的な問題事例をあげ具体的に『トラブル・危険性』について説明、指導していく。	・校内における携帯電話の使い方を徹底させる。 携帯電話は各クラス、朝のH R で担任に提出、帰りのH R で担任より返却。校内での使用は禁止。あま、登下校時の安全確保をその使用目的の趣旨としている。 SNS等の使用にあつては、『限られた状況の中でコミュニケーション』は、一方的な会話に陥り、誤解を生じやすい表現の可能性など、SNSの特性を理解、指導する。	・校内における携帯電話の提出・返却に関しては徹底できている。しかし、SNSに関しては、学校としてすべてを把握することは物理的に不可能な現状がある。 メール・モラルの観点からの指導など、まだまだクリアしてはならない課題が残っている。	・社会にSNSに起因する多くの事件・事故が多発している現状がある。本校に於いて、現時点ではSNSによるトラブルは発生していないものの、この社会状況・家庭環境考えれば、いつ発生しても不思議ではない環境であるため、生徒のみならず学校も緊張感をもって注意を払っていかねばならないことは不十分である認識している。	・今まで実施してきた『携帯電話安全教室』の実施など、更にあらゆる角度からの対応で事故・事件防止に努めるための方策を検討していくこととする。	・『全体集会』は『ホームルーム』『携帯電話安全教室』などにより、携帯電話の指導は継続して事件・事故が起こらないように指導していくこととする。
進路指導	○ 音楽を通しての高・大連携の一貫教育 『高校→系列大学・短期大学』への進路指導	・高大連携のメリットを生かした高校教育・カリキュラムの実施。 専攻実技の課題曲に関しては、将来、系列大学・短大に進学した上で、より効果的・効果よく演義スキル、表現力が身に着くための基礎力の養成を目的に組織的に組み立てられている。その他の音楽科目としては音楽理論、リハーシュー、また、一般教員に於いては外国語（ドイツ語：3年生で2単位）など将来を見据え入居体制を取っている。大学卒業後、社会との関わりを視野に入れた領域をいかに検討していくかが課題となっている。	・今まで、大学・短大の教員より実施されている『大学・短大進学講座』は高校生進出、大学・短大の教育の内容を理解し、将来大学・短大で自分だけの分野を専攻していくことが、どのようになら身に付けて社会と関わりながら行っていくことが出来るようになる。また、大学生・短大生のコミュニケーションの場では、学生生活での様子で紹介されると、キャリア教育の実体験も高校生進出には良い刺激となっている。	・『大学・短大進学講座』を進めたい中で、それが各学年に於いて、どのような位置になっているかを正確に把握する必要がある。それを踏まえて、高校生にとって音楽という芸術を幅広い視野で捉えるために『大学・短大進学講座』の目標の設定を再確認し必要とする。又、それと進路指導をリンクさせることが更なる課題である。	・『大学・短大進学講座』を高校生が受講することによって、将来、『音楽を生かした社会との関わり』を高校生時代から意識して考え、自己の将来何に取り組んでいこうかという方針を立てる上でヒントにもなっている。	・卒業生（附属高校から系列大学・短大へ進学して卒業した卒業生）に現在の学びで音楽を生かした社会との関わりを持っているか ・現在生の学びでコミュニケーションの場では、具体的に『音楽』に関する社会との関わり方が紹介されている。中学校音楽科教員、自衛隊音楽隊の隊員、音楽療法を実践している施設職員、演奏活動に従事している卒業生、音楽教室指導者などから、それぞれの現場での様子とその職種に関わった際の具体的な取り組み方など具体的なアドバイスと伝えられ、高校生が将来へのキャリア教育の一歩となった。	A ・高校生もその父母も、大学・短大を卒業した後の具体的な社会との関わり方の部分を中心に目撃して進路決定をする傾向が強まっている。『大学・短大』はどのような人材を育て、その育肉のめがけはどのような指導・教育が行われているのかを具体的に分かりやすく、どのように高校生とその父母に示していくが大きな課題である。来年度は、高校生達が職種に関わった際の具体的な取り組み方など具体的なアドバイスと伝えられ、高校生が将来へのキャリア教育の一歩となった。
	○ 『音楽芸術への実践的な取り組み』 ・2016年12月10日(土)、11日(日)、オペラ「ワーグナー」への出演	・6月にオペラ彩主催、オペラ「ワーグナー」への出演依頼が東邦音楽大・短大・東邦第二高等学校にあり、『合唱』での参加が決定する。	・8月より稽古が始まり、生徒達は今全て曲に挑戦することとなる。勿論、全体の稽古以外に第二高校の専攻専攻の専任教員が放課後等、学内で合同の基礎練習をきめ細かく実施し、それを全体練習に生かすように指導した。	・10月からの立ち稽古では、プロで活躍されているソプラノの佐藤美枝子も、鈴木麗江、テールの村上敬明氏、東邦音楽大の佐藤泰弘氏が参加された。そのようなプロの中で、生徒達は相当の緊張感を感じながら演技と意欲的に取り組んでいた。	・11月の本番が近づいていき、衣装合わせやオケ合わせと、オケが上手に上がって行く中で、生徒達は見え見えと一生懸命と歌い演じている姿が出来るようになって来た。	・本番の2日前は大盛況で会場、サンアザリア（相光市）は熱気に溢れていた。生徒達は意外に落ち着いた、稽古の時より役になり声高々に個々の役を演じていた。 大勢のオケの方々と共に盛り上げる大舞台の一員として出演出来たことは、生徒にとって大きな喜び・感動となり、一人一人の音楽感に大きな変化と新しい広がりを与えることとなった。	・今年度のオペラ彩主催、オペラ「ワーグナー」への出演に引き続き、来年度は「ワーグナー」のオペラ「トランプト」(2017.12.23.24)への出演依頼が来ており、音楽科の生徒達にはこの上ない魅力であり、日本の学校で味わえない貴重な体験を得られるチャンスなので、その学び行事としてのバリエーションを考慮しながら前向きに生徒の参加を検討していくこととする。
全般	○ ボランティア活動とその具体化についての再検討	・ボランティア演義の実施。 南谷谷病院でのコミュニケーション(28.6.10) 帯津三教病院でのコミュニケーション(28.12.22) (ボランティア活動の内容と活動範囲を検討する) ・第32回青少年健全育成川越市民大会への参加	・ボランティア演義の実施計画の作成 演義者は会場で選考し、演義形態・演奏曲目は各演義者と検討する。 ・日頃より川越市のボランティア活動にいかに関わって行けるか(小学生のためのレクリエーション活動の企画・運営など)	・ボランティア演義会は生徒達にボランティアの意義を認識させることと共に、生徒達はその場に相応しい演義の在り方を創出し、夫々の演義の準備に主体的に取り組んでいる姿が見受けられた。 生徒達は、改めてボランティアとは何か、その活動とはどのようなべきかを考察していた。 ・ボランティア活動をするための研修会の参加	・ボランティア活動を通して、生徒はにに対する思いやり、チームワークの大切さを学んだ。 『ボランティア』自体の認識はあるが、それを生徒がどのように自分の体験でどのように受け止めてきたかが難しかった。 ・ボランティア研修会を通しての具体的な計画の検討	・生徒達はボランティア演義を通して、ボランティア活動の社会的意義と色々な形で演義の在り方を学習した。(2012年ボランティア支援団体「国際的ボランティア」埼玉」から活動の認定を受けて以来、毎年その活動には意欲的に取り組んでいる。 ・中学一年からジュニアリーダーとして川越市のボランティア活動を始め、地域行事の運営に参加した。その後、毎週研修会に参加して地域ボランティア活動に意欲的に取り組むこととなり、高校3年生が第32回青少年健全育成川越市民大会にて『青少年地域活動顕彰(やまぶき賞)』を受賞。	・『ボランティア活動』は『演義』のみに限定せず、様々な形態を検討し、更なる充実と推進に努めることとする。 ・来年度は、『国際的ボランティア』に於けるボランティア活動への参加を予定している。
	○ 地域貢献を目指した演義活動、また、公立中学校と本校のインドオケストラによる実技指導やアンサンブル演義会を通しての交流	・南谷谷インドオケストラの活動（南谷谷地区中学生の活動） ・南谷谷ニューオーケストラ（南谷谷地区の小・中・高等学校、また地域住民との活動） ・公立中学校と本校のインドオケストラによる実技指導・アンサンブル演義会を通しての交流を企画・検討	・南谷谷インドオケストラの活動 ニューオーケストラn南谷谷への出演（南谷谷及び第二高校インドオケストラ・合唱の演義） ・新座市第六中学校において本校インドオケストラによる実技指導と演義会を平成28年5月21日(土)に実施することで、その具体的な内容の検討と準備を進める。	・毎週土曜日午後の東邦音楽大学での地域の中学生・高校生・一般社会人から構成されている、南谷谷インドオケストラの練習（演奏）は『地域の音楽芸術に対する意識の向上』に長年かけて育んできた。 ・新座市第六中学校において本校インドオケストラによる実技指導と演義会を平成28年5月21日(土)に実施することで、その具体的な内容の検討と準備を進める。	・ニューオーケストラn南谷谷の準備・打ち合わせを始め、(平成28年1月10日開催予定) ・本校の生徒が中学生を指導するに当たっては、本校の担当教員より、各楽器の指導内容・指導方法を詳細に習って生徒に指導することとする。 ・本校の生徒が中学生を指導するに当たっては、本校の担当教員より、各楽器の指導内容・指導方法を詳細に習って生徒に指導することとする。	・定例化しているニューオーケストラn南谷谷は、年々地域からの参加団体が増え、更なる充実が図られている。同時に、地域貢献の意義を本校の生徒達により一層理解させていた。 ・本校生徒達にとって、自分が指導する立場になって初めてその意義と大変さを実感し、緊張感ももちろんその指導に創意工夫を凝らし取り組んでいくこととする。	・『地域に根ざした音楽への意識の向上』を目指した南谷谷インドオケストラの演義活動は、ニューオーケストラn南谷谷をメインに今後ますますの練習・演奏活動を活性化させていくこととする。 ・新座市第六中学校での本校インドオケストラの実技指導と演義会は、中学生にとって各楽器演奏の、そのスキルアップを図るとともに、高校生にとっても貴重な経験となった。
○ 埼玉県近郊の『音楽系高等学校』との合同演義会の実施。音楽専門学校の活性化を図る	・音楽教育の活性化を図るに近隣の音楽系高等学校が参加して、合同演義会を開催している。(東邦第二高等学校専攻主催)	・『第六回北関東甲信越音楽系高等学校演義会』は本校が主催し、本校音楽ホールで各校の代表演奏者による演義会を実施する。本校生徒は全員その演義会を鑑賞する。	・この演義会には出演者の演奏への意欲の向上と、聴く生徒に演奏者から演奏と向き合う姿勢を学ぶ良い機会となっている。	・『第六回北関東甲信越音楽系高等学校演義会』の事前打ち合わせでは各学校の校務状況を鑑み、電話・メールによるものとした。	・演義会を通して『各学校の演義した生徒達は、それぞれが日々の自分の演義のアップ、表現力などを返す返すある良い機会となった。同時に『音楽系高等学校間の親睦』にも大きく貢献できた。	・『第七回北関東甲信越音楽系高等学校演義会』は来年6月17日(土)に開催予定。学校間の交流を図り、生徒達の演奏技術・音楽性の向上に、更により良い演義会を目指して行くこととする。	

達成度 A:ほぼ達成(8割以上) B:概ね達成(6割以上) C:変化の兆し(4割以上) D:不十分(4割未満)